



医者は信頼しても頼らない

病気には治るものと治らないものがある。医者にも治せる病気と治せない病気がある。私自身、身内五人の介護と四人の子育てを経験して、一番多く向き合ったのが医師だった。

患者はよく、先生にお任せします」という言葉を発し、医師に頼る。任せただことで、責任は相手にあるということになり、結果が悪かった場合は医師に裏切られたという思いになる。しかし、一日に何人も患者を診察する医師の側では頼られても、責任が持てないこともあるだろう。

私は自分の経験の中から、医者は信頼しても頼らない」という視点で向き合うことにしてきた。病気を治してもらうことに関しては、信頼しなくては安心して体を委ねられないが、結果は自分側の問題として考える。信頼と頼らないを分けて、治療とそれを受ける人間の人生を別なものとし

て考えることで、自分自身への信頼も位置づけた。

介護の果てにくるのは死であるが、ここで家族と医師、その人の人生と医療がぶつかりあう。あくまで、私は医療より、高いところにその人の人生があると考える。人生の一部に医療が関わっているという考えだ。ということは、家族の力の下で医療がサポートをするということだ。

父の最期。

点滴の薬が体に入るのだが、尿として出ない。薬が体にたまり、父はたぬぎのよつなお腹をしていた。

相当、苦しかったのだろう。付き添っていた私に、

「俺を殺せ!」と叫んだ。

「嫌だ、殺人者になりたくない」と私が言うと

「薄情な女だな」と般若のような顔でにらんだ。

叫び続けた。三日目の朝。私はベッドに上がって、水膨れの父を抱いた。

私の手も足も痺れるほど重い父だった。

「お父さん、もういいわよね」と言つと父の顔は一瞬、穏やかになり

「もう、いい。充分、生きた」と言つて眠りだした。

眠りから昏睡に入ったのだろつ。額に脂汗がにじんできた。立てていた膝がカタツと倒れた。首の下のぴくぴくという動きが止まったか止まらないかのとき、私はナースコールを押したのだ。

看護師、医師が飛んできた。父は胸を開けられ、機械での治療が始まった。ベッドから下りた私は父に向かつて、もう頑張らなくてもいいから」という声を投げかけていた。

しばらくして、父の声が聞こえたような気がした。

「もう、俺、逝くからな」

医療は生かす方向に最善を尽くしてくれた。家族である私は、医療と同時進行する中で父に向かつて、頑張らなくてもいいから」という声を投げ続けた。生に向かわせる時間と死に向かわせる時間。矛盾する時間が同時

に進行していた。

このとき、私は父の一部になっていた。死に向かうのは父なのだが、その死を共有していたような思いだった。その下で、医療が生かす方向に最善を尽くしていたのだ。

このことから、医療と、人生そのものの価値が別に存在していることを感じ取った。私はこのとき、父の人生に関して、医療には頼らなかつた。父を含む、家族としての私は、今まで信頼して治療を受けてきた医療に感謝しながらも、最期は医療に頼らず、父の人生に付き合つたのだ。

医療には限界がある。

死へ向かう扉が開き始めたら、医療より家族の力の方が強い。

生かされる生より、生ききる人生。それは、生の終わりではあるが、家族にとって別れではない。生き残るものと共に再び生き始めるということでもあるのだ。